

## 大隈講堂の生き続けるための保存再生

学校法人 早稲田大学 殿

株式会社 佐藤総合計画 殿

戸田・熊谷建設共同企業体 殿

昭和 2 年に竣工した大隈講堂は、建築設計は佐藤功一およびその弟子佐藤武夫、構造設計は内藤多仲によって故大隈重信の記念講堂として建設された。約 80 年間にわたり大学の講堂としての機能を超えた歴史を積み重ね、早稲田のシンボルだけに留まらず、「記憶の原点」としても特別な思いが込められた建築物である。

その大隈講堂が 2007 年に再生され、同年に国の重要文化財指定を受けた。1998 年に大学関係者を中心に設計者・施工者を含め、8 年に亘り大隈講堂利用構想検討委員会が開催され、「利用・活用・改修」について議論が重ねられた。そこで掲げられた課題は次の 3 点である。ひとつは「身体再生」：物理的な建築性能を健全にすること、二つは「機能向上」：利用者に今日的なサービスができるようにすること、三つは「記憶継承」：オリジナルの再生など歴史と記憶にある建築の本質を変えないことであった。また、記憶継承の設計コンセプトは「感性と感触の復元と保存」である。オリジナルのデザインの保存に留まらず、当時の空間に染み込んだ時間や空気までも保存するために、さまざまな技術と手法を駆使している。

まず、大隈講堂は大隈講堂のシンボリックな空間であり、細心の留意で設計が行われた。その内部空間は宇宙観に満ちた独創的な空間である。しかし以前の改修時に空間を明るくするために、天井は白く塗装され、ダウンライトも追加設置されていた。オリジナルは森羅万象をイメージした昼と夜の自然のドラマを彷彿とさせる色彩であった。そこで、天井の色は夜空をイメージしたグレーに戻し、バルコニー下はオリジナルと同じ夕焼けをイメージしたオレンジに再塗装した。ダウンライトはグレーの夜空の星と見立てることによって、当時の設計者の思いを変えずに継承することができた。佐藤武夫による音響設計も高いレベルであった。そこで、仕上げ材料の選定は、再度音響シミュレーションを行いながら実証した。またホールとしての機能を最先端にするためにサウンドロックを施し、座席椅子には冷暖房吹き出し機能、同時通訳、LAN 等の機能を組み込んだ。

また、外壁タイルは剥離落下の危険性から、一部のオリジナル保存以外は全面撤去による復元を行った。ゴシック調の時計塔と外壁スクラッチタイルは、キャンパスのシンボルとして、また地域景観の原風景として重要な役割を担っている。タイル復元に関しては、同じ産地での土の調合で行った。当時と同じ手作業でのスクラッチ生成、タイルの切断、焼成を行った。

構造については元来、内藤多仲による構造設計で大きな問題はなかった。免震工法も検討されたが、在来工法による補強で対応している。意匠デザインに対して影響の少ない格

子状の補強を地下小ホール壁面に施している。小ホールは、新たにデザインされているが、全体の雰囲気に合わせてる手法もあったかと思われる。

このように、前述の三つの課題を達成すると同時に「感性と感觸の復元と保存」に成功している。生まれ変わった大隈講堂は現在フル稼働である。重要文化財に指定されながらも、本来の建築文化とホール機能を両立しながら活用されている。保存だけに留まらず、将来に広く建築文化と教育文化を発信し続ける新しい可能性を示すものであり高く評価される。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。